EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

No.52
2009
（平成21年）
11 − 12

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

目次

データで見る「友の会の構成」……1
友の会セミナー『国技館100年を振り返る』……2
友の会セミナー『中世から江戸初期にかけての隅田川』‥3
特別観覧会『よみがえる浮世絵』展 ……4
江戸博クリップ『京都再訪』……4
見学会「足利市内の史跡探訪」（バスツアー）……5
えど友研究発表会「会員3氏が研究の成果を発表」……6
えど友サークルだより／会議・会合日誌 ……7
えど友プラザ『そこまで使いを…その距離は？』……8
『さくらじま　けふ静かなり』……8
『東京ファッションと青森』……8
『久し振りに品川宿を歩いて』……9
落語で江戸散歩…⑪［佃祭］……10
催事案内／会員優待のお知らせ …… 11～12

データで見る 友の会の構成 依然として増えている60代、70代

本年8月末現在における「友の会」会員の状況をお知らせします。

◎男性67.7%、女性32.3%

会員総数は1,655人で、昨年同期より91人増えています。うち男性は1,121人（昨年より63人増）、女性は534人（同28人増）で、男女比はここ5～6年殆ど変わらない数値で推移しています。

◎やはり増えている60代、70代

ここ数年増えている年代は60代、70代ですが、今年も増えており、「表1」のとおり、この年代だけでも昨年より96人増で、上記91人の合計人数を超えています。逆に減少した年代が40代、50代で昨年より15人少なくなっています。

表1 〈年代別〉

	2009/8月末		2008/8月末	
	人数	%	人数	%
30歳未満	20	1.2	10	0.6
30代	42	2.5	42	2.7
40代	103	6.2	109	7.0
50代	269	16.3	278	17.8
60代	629	38.0	569	36.4
70代	426	25.7	390	24.9
80歳以上	102	6.2	96	6.1
不明	64	3.9	70	4.5
計	1,655	100.0	1,564	100.0
平均年齢	64.2歳	—	64.0歳	—

◎「東京都」居住者が64.4%

住居地別ではいずれも少しずつ昨年より増えていますが、「東京都」の居住者が相対的に少なくなっています。「表2」のとおり、昨年より0.2%減ですが、3年前の「東京都」居住者は67.8%でした。

表2 〈住居地別〉

	2009/8月末		2008/8月末	
	人数	%	人数	%
23区内	908	54.9	868	55.5
23区外	158	9.5	143	9.1
（東京都計）	1,066	64.4	1,011	64.6
埼玉県	155	9.4	147	9.4
千葉県	244	14.7	229	14.7
神奈川県	111	6.7	105	6.7
（3県計）	510	30.8	481	30.8
その他	79	4.8	72	4.6
計	1,655	100.0	1,564	100.0

◎06年以降の入会者が60%超

「友の会」発足（2001年）から5年の間に入会した人は昨年より87人少なくなり、604人（36.6%）となりました。この数字は3年前には878人もいましたので、3年間で274人もの多くの会員が退会したことになり、年次別入会者のかなりの人数が変動している様子が伺えます。

表3 〈入会年次別〉

	2009/8月末		2008/8月末	
	人数	%	人数	%
2001年入会	216	13.1	239	15.3
2002年入会	70	4.2	77	4.9
2003年入会	122	7.4	135	8.6
2004年入会	84	5.1	106	6.8
2005年入会	112	6.8	134	8.6
2006年入会	230	13.9	256	16.4
2007年入会	260	15.7	329	21.0
2008年入会	355	21.4	288	18.4
2009年入会	206	12.4	—	—
計	1,655	100.0	1,564	100.0

◎08年からは伸びが鈍化気味

「友の会」発足から各年の会員数をみますと、2007年の対前年伸び率をピークにその後は鈍化しているようです。因みに、「表3」にありますように今年の8月末までの入会者は206人ですが、昨年同期には288人の入会者がありました。

表4 〈会員数推移〉

	会員数	対前年%
2001年	577	—
2002年	826	143.2
2003年	872	105.6
2004年	962	110.3
2005年	991	103.0
2006年	1,069	107.9
2007年	1,319	123.4
2008年	1,527	115.8
2009年	1,660	108.7

（注）2001年は5月末、他は3月末現在

【報告】広報部会・福島信一
集計：事務局・堀井なつ恵

第84回　江戸東京博物館友の会セミナー（2009/8/22）

「国技館100年を振り返る」

講師　水野尚文さん（『グラフNHK大相撲』元編集長）

今年は「両国国技館」が開館してちょうど100年になります。本日は国技館開館前後の相撲界の動きなどのお話をいたしましょう。

明治時代前半の相撲界

江戸勧進相撲は江戸庶民の娯楽として天明・寛政のころ(1781〜1800年)最盛期を迎え、幕末まで相撲人気は続きました。しかし明治維新による文明開化の風潮から相撲は野蛮なものとして排斥され、版籍奉還により力士はそれまでの大名のお抱えを解かれて生活が苦しくなりました。当時は今日の相撲協会に当たる「相撲会所」では筆頭（ふでがしら）と筆脇（ふでわき）が収益のほとんどを独占する封建的なものでありました。これを打破して相撲界の改革を実現したのが初代高砂浦五郎でした。明治6(1873)年会所から脱退して改正組を組織した高砂は、明治11(1878)年会所に復帰すると改革に着手、「角觝仲間申合規則」を制定して取締制にし、力士年寄らに対する給金規定を定め、明治22(1889)年には会所を改めて「東京大角觝協会」として組織を近代化しました。また明治17(1884)年3月には明治天皇の天覧相撲が催され、これをきっかけに大相撲の人気も上昇しました。明治30(1897)年代には梅・常陸（二代梅ヶ谷と常陸山）の台頭をはじめとする有力力士が多数輩出し、大相撲は黄金時代を迎えました。

しかし本場所は相変わらず回向院境内での小屋掛けで、10日間の興行は雨が続くと20日から1カ月もかかることがあり、屋内で興行できる常設館の建設が望まれるようになりました。折から日清戦争(1894〜1895年)後の国力の充実に伴う近代化の進展と首都東京の変貌もあって、その機運は急速に高まってきたのです。

明治39(1906)年には協会内に常設館建設委員会が設置され、また帝国議会には常設館建設のため3万円を援助するという「大相撲常設館国庫補助に関する建議案」が上程されました。この建議案は衆議院では満場一致で可決されましたが、貴族院で審議未了廃案となりました。

人の褌では相撲は取れぬ

そこで、相撲協会では人の褌（ふんどし）では相撲は取れないと自力建設案が提起されました。まずどこに建てるかということですが、日比谷公園、丸ノ内や上野などという意見もあったのですが、両国の地元（本所区）から要望が強くあり、回向院の北東の敷地内で江東（えひがし）小学校（今日の両国小学校）が移動した跡地に決まりました。しかし当時は建てるといってもどこにもお金はありません。雷取締（いかづち）（元横綱初代梅ケ谷）の努力により飯島保男（元本所区長）の協力を得て川崎銀行から25万円の融資を受けることに成功します。その際、担保はと聞かれると、袖（そで）を捲（まく）り上げて自分の右腕をボンと叩いて見せたといいます。設計を依頼された辰野金吾博士は、お雇い外国人で工部大学教授のジョサイア・コンドルから建築学を学び、英国に留学し西洋建築の奥義を極めた人です。国技館（相撲常設館）の他には日本銀行本店、東京駅などでも有名です。施工は石川島造船工業に依頼、円形4階建のドームの大殿堂で柱が1本もない吹き抜け造りであり、造船技術がふんだんに生かされたものでした。相撲常設館の設計にはロンドンのロイヤル・アルバートホールを参考にしたといわれます。

平成3年に大相撲のロンドン公演があり、このホールで開催された時団長の二子山理事長（初代若乃花）は「元の両国国技館にそっくりだ！」と言いました。「わしらの初土俵は元の国技館だった。千秋楽の翌日、双葉関の最後の土俵入りを4階から見ておったよ」と追想していました。明治39(1906)年に建築工事が始まってからは明治42(1909)年に完成するまでの4場所は、回向院境内の従来の相撲場が資材置場となったので、隅田川東河畔に小屋掛けで行なわれました。

「国技館」の名称について、常設館建設委員長の板垣退助は「尚武館」を提案しましたが決まらず、尾車委員が作家・江見水蔭執筆の「常設館初興行披露文」の中に「そもそも相撲は日本国技……」とあるのを見て「国技館」がいいのではないかと言い皆の賛成で決まりました。明治42(1909)年6月2日国技館の開館式は3,000人の招待客を集めて盛大に行なわれ、会場は花で飾られ、式では常陸山、梅ヶ谷による三段構えが披露されました。

その後の国技館

大正6(1917)年11月29日の夜半、菊人形展の失火で焼失、再建まで2年を要しました。再建されてから3年後の大正12(1923)年9月1日関東大震災で炎上。翌年の夏には復旧。昭和19(1944)年2月軍部は国技館を接収し風船爆弾の製造工場になりました。昭和20(1945)年3月の大空襲で炎上。12月に占領軍により接収され「メモリアルホール」となります。大相撲は川を隔てた蔵前の地に移りました。昭和27(1952)年に接収が解除され、国際スタジアム・スケート場などを経て昭和33(1958)年から日大講堂として使用され、昭和58(1983)年に解体されました。今の国技館が開館したのは昭和60(1985)年1月のことです。

【記録】文：広報部会・島尻茂樹
写真：同・佐藤幸彦

第85回 江戸東京博物館友の会セミナー（2009／9／26）

「中世から江戸初期にかけての隅田川」

講師　鈴木敏弘さん（成城大学民俗学研究所研究員）

東京を流れる最も大きな河川の一つ隅田川の中世から江戸初期にわたる有様をさまざまな史料でみていきます。

古文書の中の隅田川

私としてはトータルな歴史学をめざし日本史全体をみていこうという視点で史料を集めさせて頂きました。各時代により記述方法が違うので分析するのも大変なところがあります。メインとなる話は中世から江戸初期ではありますが古代の話も出てきます。

隅田川は身近な川なのですが　正式名称「隅田川」になったのは昭和40(1965)年からです。まず時代順に主要な部分を抜き出しました。

承和2(835)年「太政官符」には「住田河」、寛仁2(1018)年「更級日記」には「あすだ河」(隅田川のことらしい)、治承4(1180)年「吾妻鏡」には「隅田川辺」、康元元(1256)年「夫木和歌抄」には「すみた川」等々、その存在らしきものが見えているのですが、その他に実にまぎらわしい名称がありました。この東国にあるすみだ川と都人の貴族の教養としてのすみだ川です。正応3(1290)年「とはずがたり」は私の非常に好きな史料ですが、中に「自分は隅田川原にきたつもりが地元の人はすだ川と呼んでいて混乱している」という記述があります。これはおそらく万葉集に出てくる角太河原、角田川が和歌山に流れている紀の川のことらしく教養としてのすみだ川が都人の貴族の間に広まっていた結果の混乱であったらしいのです。

消えた隅田川

『伊勢物語』によると「武蔵の国と下総の国との間の川をすみだ河といふ」とありますが、応安元(1368)年「善波胤久着到状写」という武士団の古文書があり、一揆がおこった折、江戸・牛島に向かうという記述に「武蔵牛島」とあり、別の資料では対岸は「亀津（亀井戸)」とありますが、その隅田川は現在ないらしいのです。では、今の隅田川はなんと呼ばれていたかというとそれは『浅草寺論蔵再興勧縁疏』によると、「推古天皇の霊地に川があり、流れは二つ、その一つが隅田川、もう一つが「宮戸川」と呼ばれていた」そうです。17世紀あたりまでは、島が点在していて関屋の里に海舟が入ってくるなど河口は広がっていて、今の首都高速の向島ランプ(言問)あたりから南は駒形橋と厩橋の間、または両国回向院あたりでしょうか（はっきりしないのは海面の上昇により変化しているため)。ここに牛島がありました。これらから、本来の隅田川というのは現在消えてしまい、かって「宮戸川」と呼ばれていた支流が隅田川として残っているということがわかります。

隅田川の渡河手段

『義経記』(室町期軍記物語）によると、「隅田川を渡り下総から武蔵入りを図った頼朝を江戸重長が阻んだ。〜三日がうちに浮橋を組んで……」とあります。浮船つまり船橋とは「舟のへさきを上流にならべ縄・板を使い橋としたもの」で、この頃はこうした橋造りでした。

埋め立て前の隅田川のデルタは大きく、古代の東海道は二つありました。第一次東海道は、三浦半島から房総半島への舟でゆくルート。第二次東海道は、内陸を通り木母寺あたりから立石、小岩へ行くルート（これは明治23(1890)年の参謀本部の地図によると一直線になっているのが分かります)。この木母寺については梅若丸伝説に関するいくつかの古い記述が残されています。

梅若塚と木母寺

梅若丸で知られる哀れな人買物語の梅若伝説を伝えるところが木母寺です。梅若丸は京の白河の吉田少将惟房の子で父の死後、比叡山に預けられるが和歌の闘争に絡んで山を追われ、人買にさらわれ、武蔵の果て隅田川原で病死。その後京からあとを追ってきた母花御前（妙亀尼）はわが子の末路を知り狂女となって死ぬ話ですが、これは謡曲『隅田川』として広まります（15世紀には都の教養人も知っていたらしい)。それらの中の記述として、武蔵と下総の国境の隅田川近く隅田の関屋に梅若塚があるとしています。木母寺には「梅若権現縁起絵巻」が存在しますが、書きかえられている可能性があります。これは木母寺が天台宗にかわったのが原因ではないかと思います。

隅田川はどうなっていったか

万治2(1659)年、町奉行支配に編入されて、明暦の大火以降本所深川の改革がすすめられて、点在していた島々の間を埋立が行われたこと、寛文12(1672)年の利根川の流路の整備に伴ない国境が銚子に変わったこと、等々。このあたりが答えを導き出す参考になると思います。

ひととおり古代から隅田川というものを軸に考えてきました。今までの視点とはそこらあたりが若干違うかなと思います。これらを参考にして皆様方で自分なりに勉強していただければいいかなというふうに思います。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2009/9/25)

特別展「よみがえる浮世絵—うるわしき大正新版画」

9月19日から11月8日まで開催の「よみがえる浮世絵」友の会特別観覧会が、9月25日(金)17時から開催されました。新版画とは、江戸時代の浮世絵版画と同様の技法によって制作された、大正から昭和初期に興隆した木版画のことです。担当学芸員小山周子さんの解説によると、海外ではSHIN HANGAとして注目されているジャンルなのだそうです。今回は、日本初の大正新版画の通史展示、秀逸な日本近代版画を揃えたロバート・ムラー・コレクションの日本初公開、さらに新版画に関わる数々のエピソードの紹介等、貴重で大変興味深い展示内容です。

第1章では、「新版画」の形成過程が紹介されます。明治末期の近代化の影響で、浮世絵は衰退の一途をたどり、版元は激減、絵師・彫師・摺師(すりし)は相次ぎ廃業をしていきました。その中で木版画の伝統を守りつつ新しい芸術にしようと努力した人々の絶え間ない試行錯誤の結果、伝統のバレンや絵筆を使いつつ新たな独自の世界が創造されました。例えば、橋口五葉の《髪梳る女》では、細やかに流れ輝く黒髪、柔軟な着物の手触りが伝わってくる描写等、木版画でありながら、より自然でリアルな表現で、浮世絵とは一線を画す独自性が感じられます。

第2章では、新版画が最も華やかだった大正時代にスポットをあてます。大正デモクラシーの自由な雰囲気の中、伊東深水、川瀬巴水ら新版画作家達は意欲的で実験的な作品を次々と生み出しました。浮世絵と同じ題材を扱いながら、新たな技法の摺り重ね、斬新な構図や描写方法で数々の名作が生み出されました。ところが、関東大震災はこうした作品の版木をほとんど灰にしてしまうのです。

第3章では、震災後の復興気運とモダニズムでさらに発展した新版画の作品が紹介されます。光と影、躍動感、幻想的なシーンなど、情感の描写はとても版画とは思えません。華やかなダンスホールや夜空に浮かぶ東京タワー等、近代的な題材と木版画の組合せは新鮮です。

第4章では、第二次世界大戦前に来日しその後日米の懸け橋となり新版画を守ったロバート・ムラー・コレクションの登場です。ハーバード大学の学生、ロバート・ムラーはNYのショーウィンドーで川瀬巴水《清洲橋》に一目惚れし、その後はるばる来日し4カ月の滞在中に精力的に日本の版元や絵師と交流を深め、さらには大量の木版画を第二次世界大戦の前に持ち帰りました。展示作品からは、彼らの日米交流もうかがい知れ、芸術に国境がないことを改めて感じます。

最後の章では新版画の制作過程が詳細に紹介されます。特に、川瀬巴水《増上寺の雪》の42度摺りの再現は必見です。徐々に色が深まっていく摺り過程を見て、改めて版画の凄さに感動しました。

【取材】文：広報部会・深尾恵美子
写真：同・佐藤幸彦

江戸博クリップ

「京都再訪」

都市歴史研究室　池　田　敬　子

個人的な調査で京都に行った。学生時代に6年過ごした京都。それからも美しい季節には必ず訪れていたが、関ヶ原を越えて東の国へ来てからは足遠くなってしまった。奈良出身の私にはまさに東京は外国。初めて東名を下ってきた時には和宮の如く（イメージ）涙したものだ。それが今となっては東京は故郷の次に愛する場所となっている。

さて、京都でまず訪れたのは岩倉具視幽棲旧邸。幽棲、の言葉通りの質素な家屋。ここに大久保や龍馬、維新の志士たちが来ていたという。今の交通を以てしても中央からは不便だ。岩倉が落涙した、という話も来てみてさもありなんと思う。岩倉実相院にも立寄る。狩野派の襖絵が、「実相院日記」が、何とはなしに側にある興奮もすぐに庭の静寂に魂を抜かれた。京都にはこうした空間が多い。

翌日は京都市歴史資料館に行った。ここはかつての古巣。仕事のイロハを教わった場所だ。懐かしく迎えてくれる顔は少なくなっていたが、史料写真を複写する私に事務室から聞こえてくる声はまさに当時のままで、15年以上経ったことをふと忘れる。閲覧室もレファレンスの方法も、トイレまで何も変わらない。史料も初めて見るものなのに、この写真は私が撮ったのか、と錯覚するくらい方法も同じ。バックヤードも変わらないのだろう。

史料の中に龍馬の名前がさりげなく出てくる。こんな刺激も昔のままだ。調査に行くと太田垣蓮月が当たり前のように出てきたっけな。秀吉の新出が出たから紹介文書いてよ、とあっさり言われたな。毎日が私には目を見張る体験だったのに、ここでは日常だった。京都という器は何も変わらない。ただ人だけが通り過ぎていく。

縁とは不思議なもので、京都で私が研究していたテーマは「江戸文化」。京土産も買ったし、そうだ、東京に帰ろう。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2009/9/12）

「足利市内の史跡探訪」（バスツアー）

あいにくの大雨で9月中旬とは思えない肌寒いお天気の中、足利市の史跡を巡るバスツアーが行われ、100余名の会員が参加しました。足利市は栃木県の南西部に位置し、足利氏ゆかりの地として多くの史跡や文化財が残っています。

足利学校

まずは日本最古の学校として知られる足利学校をボランティアガイドさんの説明のもと見学しました。この足利学校の創建については、鎌倉初期の足利義兼説など諸説ありますが、その歴史が明らかになるのは室町時代中期で、関東管領上杉憲実が、書籍の寄進や庠主（校長）を招き入れるなどして学校を再興してからです。16世紀の初頭には生徒数3千人を数え、フランシスコ・ザビエルによって海外にも紹介されました。

現在は、学校門や孔子廟などの江戸時代に創建された建造物が残るとともに、江戸中期当時の様子を復元した方丈（講義や来客のための座敷）や庭園が公開されています。

▲足利学校のシンボル・学校門

方丈の中では足利学校の歴史に関する史料が展示されていますが、漢字検定コーナーなどもあり早速チャレンジしている会員の方々もちらほら。方丈から眺める南庭園は雨に濡れて緑が映え、とても美しかったです。

▲足利学校の方丈で

鑁阿寺

続いて、おいしそうなお蕎麦屋さんや甘味処を横目で見ながら石畳の参道を抜け、足利学校のすぐ裏手にある鑁阿寺へ。もとは足利氏の居館跡であり、四方に門を構え、その周りを堀がめぐっており鎌倉時代の面影を現在も残しています。文治5(1189)年に足利義兼が館の一角に持仏堂を建てたのが鑁阿寺の始まりと伝えられ、以降足利氏の氏寺として繁栄してきました。真言宗の本山で、本尊として大日如来が祭られており、地元では“大日さま”と呼ばれ親しまれています。

▲鑁阿寺の太鼓橋

入口にある仁王門は楼門としては県内最大で、ここにある仁王像は運慶作と伝えられています。また、この仁王門に架けられている太鼓橋は安政2(1855)年に作られましたが、瓦屋根がのせられた、非常に珍しい形をしています。本堂の横にある大きなイチョウは樹齢550年の巨木で、江戸時代には本堂を前にこの樹の下で青年男女のお見合いが行われ、縁結びの御神木とされていたとか。たしかに途中で幹が2つに分かれていて2本の木がひとつになったようにも見え、ご利益がありそうです。

栗田美術館

昼食の後は鑁阿寺からバスで15分ほどの郊外にある栗田美術館へ向かいました。創立者である栗田英男氏が蒐集した伊万里・鍋島を1万点あまり収蔵する世界最大級の陶磁美術館です。陶磁器についての知識も美術品を見る目もまったくない私でも、そのコレクションの膨大さと美しさにすっかり目を奪われました。栗田英男氏は約半世紀をかけて驚異的な情熱をもって伊万里と鍋島のみを蒐集し、それ以外の作品には一顧だにしないその信念がこの美術館の特色です。

▲栗田美術館本館

約3万坪の自然溢れる広大な敷地には本館、歴史館、陶磁会館など大小さまざまな建物が屹立しています。山の斜面にあるため、上り坂では息が上がりましたが、幸い雨も止み、滑りやすくなっている足元に注意をしつつ、松林の散策も楽しむことができました。紅葉の景色も素晴らしいとのことなので、ぜひまたその季節に訪れたいと思いました。

佐野厄除け大師

最後は、厄除けで有名な惣宗寺（佐野厄除け大師）でたまった厄を一生懸命はらって今回のバスツアーは終了となりました。

▲佐野厄除け大師

個人的な話になりますが、私自身生まれてから高校卒業までこの足利市で過ごし、幼い頃は“大日さま”の縁日を毎年楽しみにしていましたし、足利学校へは写生の授業などで何度も訪れたりしていたのですが、じっくりと歴史を学びながら見学をしたのは恥ずかしながら今回のツアーが初めてでした。自分の故郷を改めて知ることもできた貴重な一日でした。

【記録】文・写真：広報部会・中里弘子

第１回　えど友研究発表会（2009/8/6）

会員３氏が研究の成果を発表

第１回の「えど友研究発表会」は、曇天ながら蒸し暑い８月６日(木)の午後（時間は13：30〜16：30)、江戸博／第１・２学習室で開催されました。発表者は杉浦隆之さん、寺島玄さん、後藤幸子さんのお三方で、日頃精進されている研究の成果を披露されました。参加者は約100名でした。

初めに松原会長から、本発表会の開催の経緯と、初めての試み故の心配事などが披露されました。しかし、３人の発表者が応募され、参加予定者も120名以上となり、“案ずるより産むが易し”の結果となりそうで、関係者一同胸をなで下ろしている、残るは発表内容だけと（発表者へのプレッシャー？）の開会の挨拶があって、会は始まりました。

以下、発表された順に、その要旨を報告します。

１．杉浦隆之さん：「芭蕉とお七」〜芭蕉　旅枕〜

この発表は、「旅の詩人」の地位を確立した芭蕉の事績の中で、特に延宝8(1680)年の初冬以降の10年間を考察したものでした。

芭蕉は37歳の延宝８年、それまで住んでいた日本橋小田原町から深川元番所へ隠居します。そして、２年後そこで被災した「お七火事」をきっかけとして、「無所住の心を発し」て、『野ざらし紀行』旅立ちとその５年後の『奥の細道』に繋がることとなります。

「お七火事」は、天和２(1682)年12月28日「未下刻、駒込大円寺より出火、本郷から深川に至る地域が不残類焼仕候」となります。この火元から約６km離れていた芭蕉庵も焼け落ち、芭蕉は隅田川に飛び込んで難を逃れたとのことです。この時の情景を「隅田川 芭蕉飛び込む　水の音」と杉浦さんは詠んでいます。

▲杉浦隆之さん

当時は四十歳は初老とし人生五十年と言われていました。火事被災を転機とした芭蕉の心情を、従来の定説とは異なる視点からの発表でした。

２．寺島玄さん：「永井荷風作『放水路』に込められたメッセージ」

この発表は、『放水路』に記された永井荷風の心情を考察したものでした。

ここの放水路とは、荒川放水路、現在は“荒川”と呼ばれるものです。明治43(1910)年、東京の江東地区に発生した大水害を契機に荒川の改修計画が立てられます。荷風が大正３(1914)年の秋の彼岸に、六阿弥陀詣に赴いた恵明寺（えみょうじ）（南足立郡沼田村）の近くで、休み茶屋の老婆が来年には荒川の桜も見られないと話すのを聞いて、放水路開削の工事が始まっていることを知ります。これ以降、たびたびこの地域を歩いて取材しています。その経緯を『残春雑記』の一部として昭和11(1936)年に発表しています。

▲寺島玄さん

文章は全体としては、文庫本で10頁ほどのものですが、２．２６事件以降、軍備拡張政策へと進む政界・軍部の姿勢への反発、そしてそのような世相から予想される自由への束縛（自由な表現が出来なくなる）等で緊張感の溢れた文章となっています。

ですが、拡大する東京の周縁、寂寞（せきばく）とした姿を見せていた放水路を、荷風はあまり評価していなかったのではないかと、寺島さんは話していました。

【注】「放水路」は『荷風随筆集（上）』（岩波文庫）所収。

３．後藤幸子さん：「山下玄門にみる江戸末期医学事情の一端」

この発表は、発表者・後藤さんが勉学されている“古文書解読”とその古文書解読を発端にして、関連する事柄の調査を拡げていった結果の面白さを披露するものでした（失礼！）。

後藤さんの古文書解読は、お仲間のお一人である野坂紘子さんのご先祖の山下玄門（安永元(1772)年生、安政２(1855)年没）が残した業績の一つの『養生新語』です。野坂紘子さんのご先祖については『えど友』第43号（平成20年５月１日発行）の“えど友プラザ”「ご先祖さん探訪ツアー」で発表されています。

▲後藤幸子さん（左）と野坂紘子さん（右）

後藤さん、および野坂さんによれば、山下玄門には三医書があるとのことで、一つは先の『養生新語』、残りは『疱疹一家言』『医事叢談』です。

『養生新語』の冒頭の一節には、「夫れ人の行たる養生より大なるはなし。（中略）慎むべし。其の程を知るは中庸の自得にて養生の第一義ならずや」とあり、慎みが保身の根本であると述べています。予防医学の先駆者の一人であったと評価されるとのことです。

「ひょんなことで手にした古文書から江戸末期の医学事情を垣間見ることが出来ました。古文書解読は、今後も続けます」とは後藤さんの言葉でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

発表者のお三方は、それぞれ熱っぽい語りで、その内容は興味深いものでした。第１回の「えど友研究発表会」は成功だったと言えます。

【取材】文・写真：広報部会・岡田守弘

えど友

サークルだより

◎活動概況

◆**江戸東京を巡る会**：9月15日(火)JR鶯谷駅から谷中歴史散策として、浄名院、旧吉田屋酒店、自性院、大雄寺(高橋泥舟の墓)、全生庵(山岡鉄舟、三遊亭円朝の墓)、岡倉天心旧宅・日本美術院跡などをまわった。参加者28名。

◆**落語と講談を楽しむ会**：8月25日(火)寺島玄さん・田中文彬さんの世話で「志ん生特集」。DVDで落語「巌流島」、テープで「志ん生のまくら集」などを鑑賞、お二人の「志ん生」についての研究発表があり、みんなで話し合った。参加者16名。9月29日(火)島田昭さん・山内啓巳さんの案内で、日本橋から秋葉原まで、三光新道、椙森神社等落語「百川」「天災」「派手彦」「宿屋の富」「富久」などゆかりの地を散策した。参加者は14名。

◆**藩史研究会**：8月14日(金)本妙寺（下総関宿藩久世家など)、染井霊園（常陸水戸徳川家、肥前平戸藩松浦家、伊勢津藩藤堂家など）等の寺社・霊園を参詣し、各藩の藩主墓所を参拝した。参加者23名。9月11日(金)西村英夫さんが備前一国および備中国の一部を領した岡山藩池田家の歴史について、質実剛健の気風などを中心に研究発表を行った。参加者は30名。当会はこの日が50回となるため、研究会後両国駅前「花の舞」で記念祝賀会を行った。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：8月28日(金)、9月10日(木)、9月25日(金)に例会を開催。参加者は各9、11、9名。

◆**江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会**：8月27日(木)、第27回として満願成就のお礼に第1番「高野山東京別院」に参拝した。そのあと、泉岳寺、高輪神社、東禅寺、食とくらしの小さな博物館、物流博物館などを見学し、品川プリンスホテルの和食「ななかまど」で打上げパーティーを行い、本サークルは盛況のうちに解散の運びとなった。参加者は39名。

◎新サークル、メンバー募集

◆**講談に親しむ会**

女流講談師の増大により講談ファンも増えています。講談に興味のある方、勉強してみようと思っている方などで講談に親しんでもらう会です。このサークルでは①講談を一緒に鑑賞する②女流講談師との交流により講談の中に出てくる歴史・文化などを勉強する③講談に出てくる史跡などを見学する、などを予定しています。開催は定例として毎月1回第2木曜日の13時～15時30分、会費は通信費、コピー代、講談師の車代などの経費として年3000円です。あなたもメンバーになってご一緒に講談に親しんでみませんか。参加ご希望の方は11月末までに事務局あてに氏名、会員番号を明記してはがきでお申し込みください（世話人・藤村武雄さん)。

❖　❖　❖

●「江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会」を除く**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申し込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先　〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

役員異動のお知らせ

- 運営委員・総務部会長の鈴木寛さんが一身上の都合で辞任されました。総務部会長は運営委員の藤井文乃さんが代行し、総務部会ではほかに部会長代行として菊池紀子さんが発送業務を担当、内匠屋京子さんが記録・書記を担当することになりました。
- 会計の岡東和子さんがご家庭の事情で辞任され、後任に運営委員の野川陽一さんが就任しました。

会議・会合日誌

2009／8～2009／9

◆**役員会**

8月13日(木)17時開催。諸経費の見直し、10周年記念事業計画の中間報告等を行った。出席者13名。

9月10日(木)17時開催。文政町方書上翻刻プロジェクトを今年度も極力バックアップしていくことを確認、「えど友サークルガイドライン」の改訂（コピーの実費負担）を決定した。出席者15名。

◆**事業部会**

8月6日(木)17時開催。7、8月の事業報告と今後の事業計画を決めた。出席者19名。

9月3日(木)17時開催。8月の事業報告と今後の事業計画を確認した。参加者の多い企画への対応方法を議論した。出席者20名。

◆**広報部会**

8月21日(金)14時開催。『えど友』51号の校正と次号の方針について話し合った。出席者9名。

9月18日(金)14時開催。『えど友』52号の担当とスケジュールについて話し合った。出席者11名。

◆**総務部会**

8月26日(水)13時開催。『えど友』51号の発送業務を行った。経費の見直し等を話し合った。出席者18名。

9月30日(水)13時開催。『江戸博NEWS』67号などの発送業務を行った。出席者17名。

◆**文政町方書上翻刻 プロジェクト**

8月6日(木)、9月3日(木)、17日(木) A、Bグループとも例会開催。出席者は（A）各9名、9名、8名、(B)各10名、9名、10名。

えど友プラザ

友の会 会員の投稿欄

「そこまで使いを」…その距離は？

石田憲二

押上村の春慶寺の小坊主が、岸井左馬之助の手紙を役宅へとどけて来たのは、その翌日であった。「久しぶりで一緒にのみたいのだが、夕暮れに深川の鶴やへ寄ってはくれぬか、もしも御多忙なら無理とはいわぬゆえ、放念ありたい。ともかく、自分は鶴やへ行ってくるから」と、左馬之助は書いて来ている。「行くと伝えて下さい」平蔵は小坊主に菓子をたっぷりあたえ・・・・。

これはご存じ「鬼平犯科帳」の一節です。長谷川平蔵の剣友、岸井左馬之助が平蔵と一杯飲む誘いを、寄宿している寺の小坊主に使いを頼む場面ですが、江戸時代は現代と違い携帯電話など有りませんから、時代小説などを読むと、このように寺の小坊主や店の小女などに使いを頼む場面がよく出てきます。和尚や店の主人の了解を取ったのか、駄賃は幾らもらったのか等はさておき、実際のところどれほどの距離を行き来したのでしょうか？　そんなところに興味を覚え冒頭の鬼平の例で試してみました。

春慶寺（墨田区業平２－14－9）から役宅の有った清水門外（千代田区九段下）までは地下鉄半蔵門線（押上～九段下）なら20分ですが、小坊主になりきり歩いてみました。寺を出て浅草通りを西に行くと吾妻橋に出ます。しかし同橋はこの舞台となる天明年間には２文の橋銭を取られましたので、この橋は渡らず下流の両国橋を渡ったと推測出来ます。浅草通りを西に進み、吾妻橋交番前交差点を左に折れ、三つ目通りを南に進み、緑３丁目を右に曲がり、京葉道路を西に進み途中回向院前を過ぎ両国橋を渡り、そのまま靖国通りを九段下に向かい、俎橋を左に曲がれば千代田区役所裏手に出ます。この辺りに火盗改めの役宅がありました。ここまで9761歩、1時間45分かかりました。往復では19,522歩、3時間30分かかる計算です。小坊主は途中両国橋西詰辺りの盛り場を見学しながら歩いたでしょうから往復で４時間強を費やしたことでしょう。いやはやちょっとした使いも大変ですね。ついでに役宅から待ち合わせ場所の深川扇橋脇の鶴やまで歩こうと思ったのですが、途中寄り道しながらでしたので清水門外までで13,000歩、猛暑の中歩いたこともあり、ここまでで疲れ果ててしまい断念、次回に持ち越しです。

ちょっとした時代小説の中の小ネタでした。

さくらじま　けふ静かなり

内匠屋（たくみや）京子

平成20年の大河ドラマはご存知のように『篤姫』でした。薩摩の国でのさまざまな場面で桜島が登場人物たちの背景にどっしりと構えていました。江戸に上ってからも篤姫を見守るかのごとく桜島の掛け軸が飾られていました。桜島は現在でも県人にとっては心のふるさとではないでしょうか。私の母校の校歌の一節「地（つち）ふかく　炎（ほむら）をのみて　さくらじま　けふ静かなり」もその一例ですが、校歌にもたくさん歌われています。

さて、「天璋院篤姫展」を江戸東京博物館でやっていることは知っており、職場の方からも是非行ったらと勧められていましたが、春の東京展は行けないまま終了してしまいました。ところが、秋になってたまたま鹿児島に帰省する機会を得、その折、巡回「篤姫展」が当地であることを知り、本来の所用の合間を縫い勇んで行ってきました。そしてあの掛け軸の桜島も拝見することができました。勿論その前に本物の桜島には帰鹿のあいさつは済ませました。桜島は薩摩半島からは複数の山頂があるような雄大な姿ですが、大隅半島からは富士山に似た姿にも見えます。

その「篤姫展」の会場は鹿児島県歴史資料センター黎明館でした。開館２５周年記念企画特別展として開催されていたのでした。ここはドラマに登場していた島津本家の居城「鶴丸城」の城跡でもあり、篤姫も江戸に発つ直前住んでいた地でもありました。

島津といいますと子供の頃の思い出があります。叔母の結婚式の日、雨になりましたが、親戚の皆さんが「島津雨だ。縁起がいい」とかえって喜んでいたのです。不思議に思っていましたが、「雨降って地固まる。幸先が良い」という意味だったようです。今でも雨天を「生憎の雨」ではなく「恵みの雨」と考えることがあります。

「篤姫展」を堪能するという好機に感謝しつつ、また元の忙しい日常に戻りました。同時に半年後に迫った定年退職後の生活を模索中でもありました。この数年、江戸東京博物館で常設展をはじめ夏目漱石展や書の名宝展など鑑賞し、昨年夏には「友の会」に入会していました。そういうとき、「友の会」から会報とともに部会員募集のチラシが送られてきました。春になって応募し、この４月から友の会のお手伝いをさせていただいています。

東京ファッションと青森 ―三内丸山の女―

国定美津子

青森県の三内丸山遺跡の発掘が始まったのは、平成４年からでしたが、平成６年に約4,500年前の遺跡であると推定されて以後、マスコミ等で盛んに報道されてきました。古代に特に興味があるという訳ではなかったので

すが、ある日ふと無性に行きたい気持ちが起こり、友人を誘い平成８年８月三内丸山遺跡見学の観光ツアーに参加しました。秋田のストーンサークルから八甲田山、弘前城、十和田湖、岩手イーハトーブ、南部鉄器、一の関等、東北を一巡り２泊３日で５万円。青森は２日目でしたが、三内丸山遺跡の発掘現場は、建設途中で中止された野球場の一部も残したまま、既に掘立柱の見張り台、竪穴住居や大型建物までも復元されています。この地域は青森市の南西、沖舘川の南に面する丘陵地帯にあたり、紀元前3,500～2,000年まで約１,500年間に500人程が定住していたとされます。栗・ヒョウタン・ゴボウ・豆などを栽培していたと思われる痕跡もあり、想像以上に文化の高いことが確認されました。平成12年に、国の特別史跡に指定されています。

それにしても周囲は家もなにもなく、草ぼうぼうの空き地にしか見えないような処に、素早い対応（？）であると感心いたしました。敷地内に食堂・土産店を兼ねた仮の展示案内施設があり、そこで出会った「縄文の女」の姿に思わずびっくり！　といっても実在の人間ではなく、等身大の絵姿だったのですが･･･。すぐメモ帳にスケッチしましたが、なぜ写真を撮らなかったのかと悔やんでいます。

①出土した板人形、飾り物を参考に復元。全体が赤・黒で統一されたデザイン。

②あごは細く叫び歌うごとく開いたくち。女王か妖女・巫女（みこ）のような威厳あり。

③カールのように整えられた黒い髪。赤い漆塗の玉がついたはしが二本。

④大きな鼻で顔全体を朱色に化粧し、目の周りにはメガネのような模様。

⑤両耳に下げた耳飾りは大きく丸い。細い首には大きな玉を通した首飾。

⑥魔女のごとき黒いマントに渦巻模様。履物は袋状か靴のようなもの？

⑦朱色のゆったりとした長いスカートは、昭和50年頃のファッションに似る。

他にも印象的な展示として、等身大の「近代アイヌ女性の写真」があり。

乱れ伸びた黒髪。太い眉に鋭い目付。昔の「縄文の女」のほうが平和だったのではと思える、対照的な写真でした。紀元前200年頃まで、南関東もアイヌ系民族の居住地だったから、縄文の女の感性は、東京ファッションにつながる＜ＤＮＡ＞かと、最近思い始めました。

久し振りに品川宿を歩いて

松原　良

先日久し振りに品川宿、主に歩行新宿（かちしんしゅく）と北品川を歩いてみました。このコースの大半は５年前に友の会の見学会「江戸四宿を歩く―品川宿その１」として歩いたところですが、ここ数年ですっかり変わっているところがあるのに驚きました。

驚きの一つは、八ツ山橋から旧東海道へ入ってすぐ左に曲がったところにあった荒井家がなくなっていたことです。この店は、無一文で居残った佐平次が居直る「居残り佐平次」という落語で、一夜明けて湯からあがった佐平次が「荒井家のうなぎでも食おうじゃねえか」と言ったというお店なのです。銅版建築の古い建物で、はし袋の裏には「落語の『居残り佐平次』で語られています荒井家のうなぎを御召しあがりください」と印刷してあった店です。ところが、銅版部分はやや残っているもののお店はすっかり様変わりして「ハンバーグ定食」などのレストランになっていました。でも店の名前に「居残り」という字があって、ちょっぴり救われたような気がしました。

もう一つの驚きは、その少し先の北品川橋から見た品川浦の風景です。ここは古い家並みが見られる品川唯一の場所といってもいいところで、私もかつて絵に描いたことのあるところです。『えど友』前号10ページの「落語で江戸散歩⑩品川心中」の題字下のイラスト「一昔前の品川浦」がその絵ですが、９年前の作です。この絵の船溜まりの向こうに古い家並みがずっとありますが、この右半分位がなくなってマンションになっていたのです。さらにその背景に当時もビルがありましたが、それがもっと大々的に全面的になっていました。これは開発が進みインターシティなどができたせいです。いろいろ事情はあるにせよ、こうした風景がわずか数年の間に失われていっているのを実感させられたのでした。

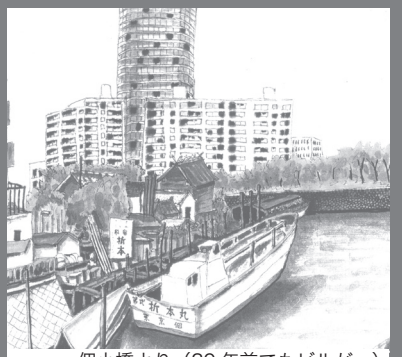
そしてもう一つ、これは驚きでも私たち江戸好き、歴史好きにはいい変化です。東海寺塔頭の一つ元妙解院の墓所である熊本藩主細川家墓所の見学ができるようになっていたのです。５年前には個人の住宅の奥で一般には入ることができず、住宅の庭越しに「あの向こう側に見えるのが細川家墓所です」という説明で終っていたところです。今でもその位置関係は変わらないのですが、その庭を通り抜けて墓所を見学できるようになっていました。

何だか「三題ばなし」めきましたが、世の中というか東京は本当によく変わるものです。でも変わるなら少しでもいい方に変わってほしいものです。

落語で

江戸散歩…⑪

[佃祭]



佃小橋より（20年前でもビルが…）

佃島住吉さまの祭り見物に来た次郎兵衛さんが、家に帰ろうと仕舞い舟に乗るため急いでいると、若い女性に引き止められます。聞けば彼女は3年前、奉公先のお使い途中で金を落としてしまい、途方にくれて本所一つ目橋から身投げしようとしたところを止められ、そのうえ次郎兵衛さんは三両もの大金をくれた命の恩人とのこと。女性は慌てていて名前も住まいも聞きもらしたが、その後佃島へ嫁いで幸せに暮らしており、それもこれもあの時の親切なお方のおかげと、一日たりとも忘れたことがない。大恩人にめぐり合ってお礼をという女性の強い願いで、ここでご馳走になることになります。そのとき大川では大惨事がおこっていました。客を乗せすぎた仕舞い船が沈没し、助かった人は1人もいないとのこと。すんでのところで命拾いをして夫婦の歓待のすえ結局泊めてもらい、翌日神田お玉が池の家へ帰ると店中は弔いの準備で大騒ぎです。仮通夜に呼ばれていた和尚さんがそのいきさつを聞き「陰徳を積めば必ず功徳がある」と説教法談。でも人情噺としてもこれだけではすこし道徳訓話くさくなってしまうので、ちゃんと与太郎を登場させ滑稽味も加味してあります。ところで世話役さんが次郎兵衛さんの死骸を引き取りにゆくについて、体の特徴をおかみさんに尋ねると、ちょっと恥ずかしそうに「左の二の腕にあたしの名が彫ってございます･･･」と、くすぐりもいい味をだしてます。

▲住吉神社

佃島・佃の渡し・住吉神社

昭和39(1964)年に廃止されるまで、佃島へは渡し船が通っていました。一度乗ったことがあります。便数も多く無料でしたが、船の排気煙と川のヘドロ臭気が混じりあい、どす黒い水と油汚れた船が息苦しいようで強烈な印象、お世辞にも渡船の情緒など感じませんでした。渡船跡の碑が隅田川の両岸にあります。池波正太郎は「江戸古地図散歩」で佃島の落ちついた風景と、島内のしっとりとした風情をすっきり描写しています。家並みは震災や戦災にも焼け残って、古い建築やたたずまいがゆかしく、数少ない“東京に残った江戸”のひとつだそうです。昭和10年代には銀座勤めの女給さんたちが美しく化粧をして、渡し船にいっぱい乗っていたとのことです。島のなかほど赤い欄干の小橋の先が、正保元(1644)年漁師たちによって最初に造成された、百間四方地なのでしょうか。住吉神社の周辺は静穏でまるで時が止まったかのよう。江戸の風が吹いているような、ある不思議な“未知の懐かしさ”をおぼえさせられます。神社の木陰で静かに接吻をしている男女はいませんでしたが･･･。3年に一度の本祭りでは広重も描いた幟が立てられ、八角神輿の船渡御など伝統の祭りのようすは、仕舞い船の心配せずに堪能できそうです。

▲渡船跡案内板

▲西仲通交番

石川島

島の成り立ちは佃島よりも古く、寄洲を寛永3(1626)年に旗本石川某が拝領し、屋敷地にしたのが島の名前になったそうです。漁師町だった佃島と違い一般人の出入はなく、石川島は公儀御用地でした。明治までは人足寄場や監獄、近代では大企業の工場などとなり、江戸庶民の生活感はありません。鬼平こと長谷川平蔵と石川島人足寄場のことはよく知られていますが、「佃の渡」が明石町側の船松町から出るのに対し、「寄場の渡」は鉄砲洲側の本湊町から出ています。島側の船着場もとうぜん別々で･･･どうでもいいか。水戸藩が此処に造船所を建設し、安政2(1855)年日本最初の洋式帆船「旭日丸」(別名「厄介丸」）を建造しました。いま石川島は地名も「佃」となり、ご存知のとおりセレブ好みの、リバーシティ21とかいう高級マンション群、瀟洒な高層ビルと小ぎれいに整備されたスマートな街です。でもよく見ると心休まる場所がありました。ビルの一角に「石川島資料館」なる小ミュージアムがあり、つつましく好感が持てます。島廻りで歩きつかれたら休憩場所としてもおすすめです。

月島・勝鬨橋

月島は明治時代に佃島の南側に埋め立てられました。西仲通り商店街をまっすぐ晴海通りへ抜けます。途中に警視庁最古の交番と書かれ、少しかしがった「西仲通交番」があります。今は巡査立寄所になったようです。名物もんじゃ焼きに敵意などありませんが、私はあの食べ物の品格（？）には決してなじめず、ちょっと早足で勝鬨橋を渡れば、いよいよ「美し国・食の王国築地」です。

【取材】文・写真：広報部会・稲垣武志
イラスト：同・松原良

催事案内

古文書講座

各編とも来年１月から第３期を開講

各期ごとに改めてお申込みいただくことになりますのでご注意ください。自動継続はありません。

◆入門編

- 講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/13(水)、2/3日(水)、3/3(水)各A、P講座
- 時間：A講座は10：30～12：30
  P講座は14：00～16：00
  (注意) A講座かP講座かの希望を明記

◆初級編

- 講師：田中潤さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/20(水)、2/17(水)、3/17(水)
- 時間：A講座は10：30～12：30
  P講座は14：00～16：00
  (注意) A講座かP講座かの希望を明記

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/16(土)、2/20(土)、3/20(土)
- 時間：14：00～16：00

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも11月28日(土)必着

◆第２期の残日程

入門編11/4(水)、初級編11/18(水)、中級編11/21(土)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展「いけばな～歴史を彩る日本の美～」

◆「いけばな」は、自然の草花や樹木を素材にした日本の伝統的な造型芸術です。その「いけばな」が、どのような変遷を経て現在に至ったかという歴史や背景を、いけばな成立期にあたる室町時代以来の花伝書、立花図や花器、いけばなを楽しむ風俗を描いた絵巻や屏風(びょうぶ)などでたどり、その歴史と芸術性を総合的に紹介する特別展です。担当の橋本由起子学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：11月27日(金)17：00～19：00
- 申込締切：11月17日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階映像ホール／企画展示室
- 定員：130名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第87回「幇間の世界とその芸」

講師　桜川米七さん(幇間)

◆米七師匠は浅草の花柳界で活躍する、日本に４人しかいない幇間(たいこもち)の第一人者です。幇間とはお座敷を盛り上げるために、座敷の空気を読み、その時々で自分を出したり引っ込めたりして、その場を楽しくする仕事(芸)です。その歴史は古く、江戸時代の中期、芸者衆が来るまでのつなぎとして客に遊びを教えていたのが始まりとか。KY(空気を読めない)といわれる人が多い昨今、師匠の芸と話を聞いて楽しいひと時を過ごしませんか!!

○講師略歴：さくらがわ・よねしち
落語家先代柳家小さんの弟子になり、のち幇間芸の悠玄亭玉介師匠の芸に魅入られ、昭和50(1975)年に弟子入りし、その後浅草花柳界で活躍中。

- 開催日：11月28日(土)14：00～15：30
- 申込締切：11月17日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第88回「江戸の食文化」

講師　小沢詠美子さん(成城大学非常勤講師)

◆江戸における食生活は、食材や調理法が豊かになったのみならず、さまざまな文化的発展が見られます。まず、魚や野菜などの食材を提供する市場が栄え、日本橋魚市場の商人たちは、江戸ッ子の代表的な存在となりました。そして、屋台や料理店などの外食産業も、行動文化の広がりとともに、江戸になくてはならないものに成長します。また、多種多様な料理本も出版されるなど、江戸の食文化の完成度がいかに高かったかをご紹介していただきます。

○講師略歴：おざわ・えみこ
昭和36(1961)年東京都生まれ。成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士課程前期修了。神戸大学大学院経済学研究科助教授を経て、現在成城大学民俗学研究所研究員・同学非常勤講師。著書は『お江戸の経済事情』(東京堂出版)、『江戸ッ子と浅草花屋敷』(小学館)など。

- 開催日：12月26日(土)14：00～15：30
- 申込締切：12月15日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

見学会

「再訪　江戸城周辺の探訪―その１」

◆江戸城周辺の再探訪シリーズの１回目です。天下人の居城である江戸城。諸大名に命じられた天下普請では戦国期の築城術の粋が集められました。敵の侵入をくい止める深い堀、そそり立つ石垣、桔橋（はねばし）、枡形門、豪壮な櫓（やぐら）。さらに、壮大な天守と城内を埋めつくす殿舎群。今回は大手門から入城し、本丸、二の丸をへて北の丸まで散策し、強大な幕府体制が創りだした近世日本最大の城郭とそこに君臨した天下人たちの政権をしのびます。所要時間は約３時間、竹橋または九段下で解散となります。

- 開催日：11 月 29 日(日) 12 時 45 分集合、ただし、集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：JR「東京駅」丸の内北口改札口前
- 申込締切：11 月 19 日(木)必着
- 定員：100 名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも 500 円(当日払い)

【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

お申込方法

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いなく！**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**水曜日か金曜日(10 時～ 12 時、13 時～ 17 時)**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

残り会期わずか、お見逃しなく！

●特別展

「よみがえる浮世絵 ～うるわしき大正新版画」

会　期　2009年9月19日(土)～11月8日(日)
休館日：毎週月曜日
会　員：一般 650円、65歳以上 320円、大・専門生 520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

次回予告

●特別展

「いけばな～歴史を彩る日本の美～」

会　期　2009年11月23日(月・祝)～2010年1月17日(日)
休館日：毎週月曜日と年末年始(12月28日～1月1日)
ただし11月23日(月・祝)、1月4日(月)、1月11日(月・祝)は開館、11月24日(火)、1月5日(火)は休館
会　員：一般 600円、65歳以上300円、大・専門生 480円
同伴者：一般 960円、65歳以上480円、大・専門生760円
＊小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

企画展のご案内

好評開催中！

●企画展

「えどはくでおさらい！江戸時代 ～教科書で見たあの人、この絵～」

会　期　2009 年 10 月 6 日（火）～11 月 29 日（日）
会　場　常設展示室５階　第２企画展示室

●次回企画展

「旗本がみた忠臣蔵 ～若狭野浅野家三千石の軌跡～」

会　期　2009年12月12日(土)～2010年2月7日(日)
会　場　常設展示室５階　第２企画展示室

「将軍綱吉と元禄の世―泰平のなかの転換―」

会　期　2009年12月15日(火)～2010年2月7日(日)
会　場　常設展示室６階

[訂正]　前号(No.51) 10 ページの「落語で江戸散歩⑪」の冒頭２行目の板頭のルビに誤りがあり、「いたがしら」に訂正いたします。

会報＜えど友＞第 52 号
平成 21 年 11 月 1 日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、島尻茂樹、内匠屋京子
発行：江戸東京博物館友の会
〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910